

I. 男性支援の可能性

—介護する男性支援の視点から—

司会：津止正敏（立命館大学）

基調講演「なぜ、いま、男性支援なのか」

伊藤 公雄氏（京都大学）

報告1「京都における男性対象の相談事業」

今井まゆり氏（京都市男女共同参画協会）

報告2「男性介護者の集い「ほっこりサロン」の実践」

小林 裕子氏（大阪市住吉区社会福祉協議会・
住吉区地域包括支援センター）

ディスカッション

・2014年3月8日（土）

・京都キャンパスプラザ

津止 正敏（立命館大学／男性介護者と支援者の全国ネットワーク）

皆さん、ご苦労さまです。今日3月8日というのは国連が定めた国際女性年を記念する日ですが、ちょうど5年前（2009年）の今日に、私たち男性介護者と支援者の全国ネットワークがスタートしました。あれから、早いもので発足してまる5年になります。今年は男性介護ネットの5周年を記念して、ひとつ節目の年をみんなで祝いながら新しい課題を見つけようではないかと、準備をしてきました。それは、「ケアメンサミット JAPAN」。名前は大きいけれども、そんなに大きな団体ではありません。心を1つにして、志を大きく持って将来に向けて私たちの思いを強くアピールしていこうではないか、そんな気持ちで準備を進めてきたわけであります。男性介護ネットの会員ナンバーは、既に800番を超えました。十分ではない取り組みではありますが、多くの皆さん方が集まっていたいただいて、全国各地に男性介護者のグループが生まれようとしております。

昨年2013年に、私たちは「ケアメンサミット JAPAN（Ⅰ）」と銘打って、全国のケアメングループを主宰する皆さま方に声を掛けて、一堂に会してみませんかのご案内を計画しました。そのためにケアメングループ探しをしたわけですが、全国で100カ所を超えるくらいの男性介護者の会や集いを主催する団体があって、とてもびっくりしたわけであります。こうして開催された「ケアメンサミット JAPAN（Ⅰ）—介護退職ゼロ作戦2013」には34団体の皆さまに集まっていたいただきました。今回のサミット「（Ⅱ）」には40団体を超える方をお迎えすることが叶いました。その方々の経験を交流しながら、次の5年、次の10年に向けての私たちの課題を探してみたいと思っているわけであります。今日は、「ケアメンサミット JAPAN」全体を包括するようなイベントにしながら、男性介護ネットの5周年を祝い記念事業として、そして恒例の男性介護研究会（立命館大学人間科学研究所）のシンポジウムも重ねてということでもスタートを切りたいと思っているわけであります。

今年の男性介護シンポジウムのテーマは「男性支援の可能性」にしました。

男性支援の論理と根拠を少し明らかにしようではないかと思いました。なぜ、このようなことを思ったか。私たちがスタートした当初からですけれども、次のような意見、疑問をいつも投げつけられてきたわけです。それは「どれだけ男性の介護者が増えたといっても、所詮は3割台、あとの7割は女性が介護しているではないか。やはり介護は今も昔も女性の問題、女性のテーマではないのか」こういう言い方でご意見を頂いてきました。もう一つは先ほどのご意見とは真逆かもしれませんが次のようなものです。「いまや男女平等参画型社会、男女が共に手を携えて新しい形をつくっていかうということを政策スローガンにした社会。男とか女とか言っているような時代じゃないのではないか。そういう時代なのに、なぜ男性を焦点化するのか」というご意見です。この二つのご意見とも、それなりに意味があって歴史がある問い掛けなのでしょうけれども、介護する男性を支援することの意味、あるいは根拠に関する説得的な説明責任を果たせという問い掛けと受け止めなければなりません。こうした状況というのは一般にもまだ広く残っていると思っています。そのために、今回はそうした状況に対置する論点を立てて本格的に議論してみようと思った次第であります。

少し話題を変えてみます。京都府南部のある市の民生児童委員協議会(民協)の研修にお招きを頂いた時の話です。民協のメンバーは全体で150人ほどいらっしゃるのですが、男性のメンバーが30人を切った。2割弱です。以前は圧倒的多数が男性で、男社会の民協だったのです。女性の民生委員は少数でした。だから、民協の中に女性部会をつくり、女性の民生委員の立場から議論をして意見を表明するような場をつくっていました。男が集まると、男社会、男文化で、会議は夜にするし、喫煙は常態化し、宴会も頻繁にある、そういった文化に少し不都合な女性の民生委員たちの気持ちを代弁する部会となりました。今やそういう時代ではなくなってというのです。女性が圧倒的多数を占めて、逆に「男性部会」をつくらなければいけないような時代となったというのです。圧倒的多数、主流を占めるようなメンバーに適合的な文化、仕組みとかがつくられ、そういった中からはじき出される周辺化された立場の方々の問題があるのだという認識だろうと思います。そういうことを考えますと、これまで女性モデルで圧倒されてきて、そして今もそうかもしれない介護の分では私

たち男性介護をテーマとする取り組みにもそれ相応の意味があるだろうなと思ったりしたわけです。皆さんとのご意見を深めながら、今日、明日の知見を深めてみたいと思っております。

今日のスケジュールは、これから4時半までシンポジウムをやらせていただきます。できれば、もう少し早めに切り上げて、今日はケアメングループの代表の皆さま方、スタッフの皆さま方も数多くいらっしゃいますので、その方々との意見交流会を、シンポジウムが終わった後、1時間程度、この場でやらせて頂こうと思います。その後、近隣のホテルで男性介護ネット5周年事業の前夜祭を盛大にやろうと思っています。これは男文化ではないかと言われればそうなのかもしれませんが、北海道や九州などわざわざ遠くからおいでいただいた方も多数いらっしゃいますので、皆さんとの交流を深めて、私たちの声を集めて、また1年皆で頑張ってみようではないかと、そういう意思表示をするための記念の日にしてみたいなと思っております。よろしくご協力のほどを頂きたいと思っております。

それでは、「男性支援の可能性」と題する今日のシンポジウムを進めてまいります。最初に基調のご講演を頂くのは京都大学大学院の伊藤公雄先生でございます。日本のジェンダー研究の第一人者の立場で、この分野を牽引して頂いている先生です。男性学ということでは伊藤先生に随分リードして頂いていますので、多くの皆さん方が耳にしている内容だろうと思います。「なぜ、いま、男性支援か」という、私たちが本当に知りたいこと、あるいはそこに根拠を求めたいことについての貴重なご意見を伺えるのではないかと思います。1時間の講演の後に、実践現場からの事例のご報告を頂いて、その後ディスカッションに入ります。全体を伊藤先生にコーディネートしてもらうという予定であります。

介護する人は、中高年の男性が圧倒的に多いのだけでも、私たちに先行する男性はイクメンたちもいます。イクメンたちの活動というのは積極的で、ロビー活動も盛んです。政策提案もしています。男性の新しい生き方モデルを提示しているのです。そういった若い世代から学ぶことも多いのではないかと思います。同時に、男性の支援に取り組んでいる団体も数多くあって、京都市の男女共同参画センターで男性専門の電話相談事業に参加しているメンバー、あ

るいは地域包括支援センターで介護する男性を支援しているメンバー、そういった方々と一緒に議論を深めてみたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

それでは最初に、京都大学大学院の伊藤公雄先生から「今、なぜ、男性支援か」というテーマでご講演を頂きたいと思います。では、先生、よろしくお願いいたします。